

## 高山社の絵画

群馬県の芸術家岩崎椿湖（1881–1952）の絹の絵は、20 世紀初頭の高山社養蚕学校の最盛期の様子が描かれています。この場所には、学校を創設した農家の高山長五郎（1830–1886）とその先祖が住んでいました。

高山社跡だけでなく、樹木が茂った地形や背後の丘の中腹も描かれています。これは、施設への主要なアクセスである正門から続くランプを示しています。

### 本館

手前の長屋門は、1687 年に建てられた、玄関と身分の低い人のための物置や宿泊施設を兼ねた建物です。長屋門は、20 世紀に入るまで裕福な農民で屋敷では一般的でした。門の一端には、茅葺き屋根の小さな物置小屋がいくつか取り付けられています。絵画の中央は描かれているのは本校舎です。ここは、長五郎が清温育という養蚕法をもとに、自分の設計で建て替えた実家です。清温育は、高品質の生糸を生産するための鍵となる健康な蚕を生産するために、換気、温度、湿度の制御を行いました。

この絵は、適切な温度、湿度レベル、および空気の流れを確保するのに役立った、屋根の通気丸屋根と十分な窓を示しています。主要な屋根の茶色は茅葺でできていることを示していますが、丸屋根は瓦屋根です。

### 外構

本校の建物の後ろにほとんど隠れているのは、生徒が使用するためのキッチンと浴場を備えた建物である焚屋です。1894 年に建てられ、敷地内に現在でも残されてある数少ない建物の 1 つです。焚屋のすぐ右手にある瓦屋根の小屋もオリジナルのもので、正面に見えるのは、研究室として使われていた窓や吹き出し口の多い建物で、現在は基礎のみが残っています。

団地の裏手にある離れ家と浴場の後ろには、もう存在しない倉庫が描かれています。基礎部分には大きな地下空間があり、蚕の餌となる桑の葉を保管していました。桑の葉を地下に保管しておくことで、必要な時に必要な分だけ新鮮な状態を保つことができました。

倉庫の左側には、高山社で学んでいた時に、日本各地や朝鮮半島、中国などからの留学生が住んでいた寮があります。寮の隣には高山家の神棚があります。

左端は 2 階建ての耐火倉庫（蔵）があります。中身を涼しく乾燥させた厚い漆喰壁の倉庫で、多くの日本の農場はそのようなものを持っていました。家宝や美術品など、使用されていないときに家族の最も大切な物を保管するためによく使用されていました。これらのアイテムは、季節の衣類とともに、必要になるまで倉庫に保管されていました。この絵を見ると、現存していないこの土蔵はかなり大きく、1 階に少なくとも 2 つの部屋があったことがわかります。

団地の一角、長屋門の左側には、富岡製糸場など糸に巻かれる場所に出荷する前に絹繭を保管していたと思われる小さな茅葺きの倉庫があります。